

2 多様な文化的背景をもつ子ども

(1) アンケート調査結果

アンケート 110名(男57名、女53名)

10歳 42名

11歳 39名

12歳 15名

13～14歳 7名

15～17歳 7名

(帰国児童生徒 53名、朝鮮学校 29名、日本語指導等協力者派遣対象等 15名、
その他 13名)

出身国：日本 64名、韓国・朝鮮 14名、フィリピン名 9、他 11ヶ国 18名、無回答 5名
滞在期間：3年未満 42名、3年以上 68名

1 全般的に、子どもの権利条例および関連施策について情報が伝わっていない子どもが多い。

子どもの権利条例については、「知らない」が 86名(78.2%)、条例関連の仕組みについて、「1つも知らない」が 59名(53.6%)いた。また、知っている仕組みの上位は、「川崎子どもの権利の日」および「川崎市子ども会議」であった。

2 「安心して生きる」ことを求める子どもが非常に多い。

大切だと思う子どもの権利については、「安心して生きる権利」をあげている子どもが 85名(77.3%)と、第1部のアンケート結果(62.7%)と比べても非常に多い。

また、「自分を豊かにし、力づけられる権利」は 30名(27.3%)、「自分で決める権利」は 27名(24.5%)と第1部のアンケート結果(28.4%/20.7%)とほぼ同程度であるが、「ありのままの自分でいる権利」は、17名(15.5%)と、第1部のアンケート結果(35.9%)の、約半分にとどまっている。

3 自尊感情、自己肯定意識が著しく強い。

「自分のことが好きか」で「好き」「まあ好き」で肯定するものが 92名(83.6%)、第1部アンケート結果(72.8%)よりもかなり高い。特に「好き」は 48名(43.6%)と、第1部のアンケート結果(20.3%)と比べて約2倍いるのが特徴的である。また、「自分が大切にされている」が 105名(94.5%)、「生まれてきてよかった」も 106名(96.4%)と、自尊感情が著しく強い。

4 「つらくてどうしようもない」経験のある子どもが多い。

「つらくてどうしようもない」経験のある子どもは 44名(40.0%)であり、そのうち、「がまんした」子どもが 22名(50.0%)いる。「つらくてどうしようもない」経験のある子どものうち一番つらかったことは、「友だちや先輩からの暴力、言葉の暴力」「友だちや先輩からの無視、仲間はずれ」の 31名(70.5%)、および「家族からの暴力、言葉の暴力」「家族からの無視、放置」の 9名

(20.5%)で、両者を合わせると91.0となり、第1部のアンケート結果(75.5%)と比べてもかなり高い。

5 ほぼ全員が、家は「ホッとでき、安心していられる」と思っている。

「家はほっとでき、案心していられるところ」と「思う」「まあ思う」と回答した子どもは、105名(95.5%)であり、その理由としては、「家族といっしょにいられるから」79名(75.2%)で、第1部のアンケート結果(45.7%)の1.5倍である。

6 学校は「先生がいるから」「ホッとでき、安心していられる」子どもが多い。

学校が「ホッとでき、安心していられるところ」と「思う」「まあ思う」と回答した子どもは82名(77.2%)である。その理由としては、「友達がいるから」が、一番多いが、次に「先生がいるから」20名(23.5%)が、第1部のアンケートの結果(9.3%)に比べてかなり多かった。

また、「何でも話せる人」がいると答えた子どもは90名(81.8%)、その中では「友だち」69名(76.7%)「親」64名(71.1%)が多いが、「兄弟姉妹」「祖父母」とほぼ同数で「学校の先生」が挙げられている。

7 公共施設は十分に活用されていない。

公共施設の活用については、「あまり利用しない」「利用しない」と回答した子どもは、こども文化センター85名(77.3%)、子ども夢パーク106名(96.3%)である。

「どこにあるかわからない」「なにをしているかわからない」と答える子どもが多い。なお、調査地域が、子ども夢パークとはなれていたことも多少影響していると思われる。

8 多文化共生のもと仲良く暮らしたい。

自由記述では、「外国の歴史や文化をもっと学んでほしい。」「争いのない平和な世界になってほしい。」「みんながいろんなこと(人)を受け入れてほしい。」「いろんな人と触れ合えるようにする。」「いじめをなくす。」「安全に暮らしたい。」など、多文化共生や多様な文化を受け入れて仲良く暮らしたいという記述が多かった。

(2) ヒアリング調査結果

方法：平成 17(2005)年 6 月 4 日間、市立小学校 2 校、市立中学校 2 校で、日本語指導等協力が派遣されている多様な文化を背景に持つ子どもを対象として実施

対象：7 名（男 4 名、女 3 名、11～14 歳）

多様な文化を背景に持つ子どものヒアリング調査に関しては、第 1 期権利委員会の調査と同様、日本語指導等協力者または担当の先生の協力で実施した。調査数は十分ではなかったが、「子どもの居場所」についての施策の検証を行う上で有益であり、また多くのヒントが得られた。

1 自己肯定感が強い

自分が好き、大切にされているかという質問に関しては、ほとんどの子どもが即座に肯定する。家族や祖父母との関係も強く、困ったときに発信を受け止めてもらえるという信頼感と安心感がうかがえた。

また、つらいことも何とか自分で解決しようとしているが、体質、めがねをかけていること、言葉のこと、出身国のことなど、自分でどうしようもないことに関して言われるときが一番つらい。

2 多文化共生社会への期待

日本で生まれた者、外国で生まれ来日した者、帰国児童・生徒それぞれに、多様な文化を背景に育ってきている。自分たちも日本のことを学ぶ努力をしているが、日本人も、外国の文化などをもっと勉強してほしい、そうすることで互いに理解し合えるようになるという意見が多かった。「学校でみんなの前で自分の文化を話す機会があったら、話したい。」などの発言もあった。

3 ホットできる場所と、ホットできる状態

家で、家族といるとホットできるという意見が多かったが、そのほかに、自然がいっぱいあるところ、公園、木や川があるところ、犬と触れ合えるところなどが挙げられた。また、その場所で一人ゆっくりするのが心地よく、特に友達と一緒になくていいということであった。

また、自分の国の友達と電話などで、母国語（または母語）を話したり、母国語（または母語）で書かれた書籍を読んだりするとホットできるようである。

4 その他

日本語を学び、家族が病院に行っても困らないようにしたい。

怒りたいときに、言い返せないから、がまんしている。日本語で言い返せたらスッキリする。

同じ環境の人と話し合う機会がほしい。

人の意見をよく聞くとともに、自分の意見もはっきりと伝えられる環境がほしい。

難しい言葉の意味をやさしい日本語で教えて欲しい。フリガナが振ってあっても意味がわからない。

受験のことが心配。